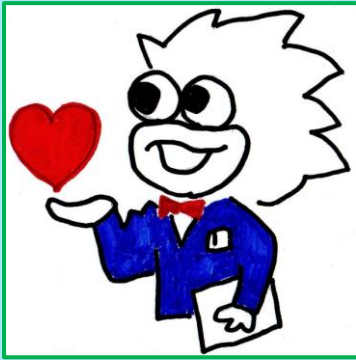


宮古・田老訪問



昨日は、宮古市の崎山小学校で行われたシンポジウム「被災地からの発信 復興の現状と今後に向けて」に参加した。コーディネーターの新妻先生（岩手大教授）から、このシンポジウムを受けて、被災地の現状などを、それぞれが発信して欲しいとの提言があった。今回は、宮古市議会議員の北村さんと、田老漁業協同組合の畠山さんの話から印象に残ったことを記したいと思う。

- 避難所の生活における防災計画には、女性の視点が必要。（本の読み聞かせや授乳スペース、団らん・・・）
- 復興はハード面だけでなく、人口減少が進む中、若者を留めるような、街づくりの視点が大切
- 田老では、958隻の漁船のうち881隻が流出、621台のワカメ昆布の施設が全滅、鮭の孵化場などの施設も全滅した。漁業はもう終わりだと思った。しかし、漁業を復興しないと地域も復興しないという思いで取り組んできた。
- ワカメ・昆布の養殖からスタートした。なぜなら、それ自体が事業であることだけでなく、ワカメ・昆布は、加工や販売など漁業者以外の雇用も生み出すからである。
- せっかく作っても、原発の風評被害で売れない。特に関西圏ではそれが顕著。我々が、日本の南の県を正しく理解していないように、関西や九州の人たちも、岩手も福島も東北としてひとくくりに見ているのではないか。また、田老のアワビの殆どが中国に輸出しているが、それも風評で売れなくなった。
- 嬉しい話として、被災をきっかけに、漁業に着業してくれる若い人が出てきたことがある。話題として、16歳の3人組が、ワカメ昆布の養殖に取り組んでいる。これは、宮古市が若者の着業者に月10万円を給付するという施策を打ち出したから。国や県の制度は、複雑でやりにくい。それに対して、宮古市のこの施策は抜本的な英断でとてもありがたい。

私がこのシンポジウムで思ったことは、次のようなことだ。

- 復興は「輪」の考えが大切であるということ。そして、それによって地域の文化を作ること。
- 局所的な活動から、輪をつくり、つなげていくこと。それは、被災地の内部にいる人間の力で生み出されるべきであること。
- 結局は自社の利潤によって動く復興事業、一時の満足を与えるだけの享楽施設、行う側が自己満足だけのボランティア、それらは、その地域の文化を発展させないということ。

そんなことを考えながら、今、自分にできることを模索していこうと思う。

（しもまち）